

---



---

**実践報告**


---



---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 1  
P.71-79 (2012)

## ナイチンゲール『看護覚え書』の構造を読む —方法としての書誌学的研究—

### An Analysis of the Structure of “Notes on Nursing” by Florence Nightingale — a Bibliographical Study as a Method —

小 川 典 子\*  
OGAWA Noriko

#### 要 旨

この実践報告は、第1回順天堂保健看護研究会で発表した内容である。

ナイチンゲールの『看護覚え書』の原文を段落、文、節、句、単語へと徹底的に解体することによって、日常の読み方では見えなかったテキストそれ自体が持つ構造的な特性、隠れた事実を浮き彫りにすることをねらいとした。

研究方法に関しては、既存の索引作成法に学び、索引作成ソフトウェアは使用せず、従来通りのカードを基にした手作業による索引作成法に準拠した。

まず、原文『看護覚え書』第1版(1859)を底本として、1センテンス毎の全文データベースを作成し、これを基に、チャプター番号、パラグラフ番号、センテンス番号からなる所在指示番号を配列した索引を作成した。

さらに出来上がった索引をもとに看護の概念、看護に関わる主要概念、それらの下位概念、これら概念間の関係などを別途抽出してシソーラスも作成し、あわせてナイチンゲール看護思想への独自の接近を試みた。

**索引用語**：ナイチンゲール、看護哲学、看護理論、書誌学的研究

**Key words**：Nightingale, nursing philosophy, nursing theory, bibliographical study

この報告は、今からちょうど15年前に行った、著者の1997年度博士学位論文についての報告である<sup>1)</sup>。看護研究は年々増加し、看護研究方法も多様化している。書誌学的研究方法は、近年非常に注目されている情報処理学の一分野であり、且つ日本古来からの文献分析方法である。

ナイチンゲールの代表的著作であり、彼女が史上初めて看護という主題に正面から取り組み、看護の概念を提示した『看護覚え書』には、学術的に使用するための索引およびシソーラスが原文においても邦訳においても、当時はまったく存在しなかった。「賢明な言葉や句は、引用されてはじめて人を関心させるのであり、それが元の文中にあるのを読む人はたいてい見過ごしてしまう」と語ったのはイギリスの美術批評家フィリップ・ハマーソンである<sup>2)</sup>。ナイ

---

\* 順天堂大学保健看護学部

\* *Juntendo University School of Health Science and Nursing*

(Feb. 28, 2012 原稿受付) (March 31, 2012 原稿受領)

チンゲールの言葉や句は、看護師らによってもっと引用されるべきであろう。ナイチンゲール研究が盛んとなりつつあった当時、その索引作成は急がれねばならなかった。

## 1. 方法としての書誌学的研究

### 1. 3つの『看護覚え書』

“Notes on Nursing”『看護覚え書』は、1859年暮れから1860年の英国で出版と同時にベストセラーになったナイチンゲール40歳のときの代表的な著作である。「人生のいろいろな折に」「他者の健康について責任を負う」<sup>3)</sup>ことになる一般の女性に向けて、特に母親に向けて書かれたが、必然的にいつのまにか看護師向けの教科書になり、フランス語、ドイツ語、イタリア語などに翻訳され、世界各地に広まっていった。日本にも明治期の女性のための家政書に『看護覚え書』の抜粋が紹介されている<sup>4)</sup>。また戦前には、日赤の看護師たちの間で、「看護の栞」という題名で、ひっそりと読み継がれていた<sup>5)</sup>。日本に初めて「看護覚え書」という題名として完全な形で翻訳されたのは、1968年（小玉香津子訳「看護覚え書」現代社）である。

“Notes on Nursing”『看護覚え書』には3つの版本がある。第1版については刷を重ねるたびにナイチンゲール自身がミスプリントを中心にわずかな訂正をした。各版本並びに第1版の刷についての書誌学的テキストクリティークは、イギリスのヴィクター・スクレトコヴィッチ Victor Skertkowicz(1990)によって詳細になされている<sup>6)</sup>。それによると、一般の女性、特に家庭の母親に向けて1859年に書かれた第1版『看護覚え書』が今日まで世界的に読み継がれ、多くの国で定本とされてきた。第1版の初版本は、出版2ヶ月で15,000冊が売れ、当時のベストセラーであった。さらにヴィクトリア女王が亡くなった1901年までの41年間、刷を重ね、その後も再製版や復刻版が出版

され、今日に至っている。

第2版（増補改訂版）『看護覚え書』は、ナイチンゲールが一度だけ大幅な加筆をし、特に「看護師とは何か」を含む補章を加えて1860年に出版された。ナイチンゲール自身、これを図書館スタンダード版と呼んだが、1860年にただ一度2,000部が印刷されただけであり、欧米でもその存在はあまり知られていない。実は日本では、この第2版の邦訳本がナイチンゲール研究者たちによって決定版とされて、長年出版されてきたので、現在でも看護師たちの間ではこの第2版が多く読まれている。

また1861年には第2版をもとに、専門的および修辭学的な記述をすっかり取り除き、わかりやすく論理をすっきりと単純にした『労働者階級のための看護覚え書』が出版され、これが研究者の間では第3版と呼ばれている<sup>7)</sup>。書籍自体の大きさも手中に納まる縮小版で、値段も第1版が2シリング（24ペンス）だったのに対して、6ペンスの安価で売られていた。この版には付録として終わりに「赤ん坊の世話」という章が付けられ、当時の英国では当たり前であった子守りをする少女のたち向けに、さらに具体的でわかりやすく赤ん坊の看護について書かれていた。著者の研究では、世界中に普及していることに加え、第2版ではナイチンゲールが加筆こそすれ削除をしていないところから、『看護覚え書』のいわば原型である第1版、それも初版本を底本として索引を作成した。

### 2. 索引とシソーラスについて

索引作成の歴史は古く、関係の研究書も多い。聖書という誰もが知るテキストを持つ国々では、その引用が古来から広く行われてきた。したがって引用したい語句、引用されている語句がどこにあるかをいち早く探す必要から、既に13世紀にはその索引が生まれ、発達したという<sup>8)</sup>。

日本でも古くから索引が登場しているが、巻末索引

が一般的であった。昭和40年代から日本の古典文学作品のほとんどについて本格的な索引整備が始まり、近年になってはコンピューターの導入により、その作業効率が飛躍的に向上している。

現在では索引作成のための電子メディアが主要な研究対象となり、統計的手法を用いてテキストを計量分析するための大規模な遡及的データベースの開発が進んでいる。索引作成ソフトも登場し、著作の出版においてはその使用が一般的になってきている。また、日本古典文学の索引では、助詞、助動詞、形容詞、形容動詞、副詞、接続詞、感動詞、接尾語、および動詞の活用形の索引なども珍しくはなく、細かな索引の数量的研究から文体の特徴を探り、作者未詳の古典の筆者推定や文献の真贋問題の検討を行うこともできる。『源氏物語』の「宇治十帖」の章は、その助詞の使い方の割合がその他の源氏物語の章と比べ「差異」があると結論づけて、紫式部以外の作者の可能性が高いという研究も報告されている<sup>9)</sup>。江戸中期の国学者本居宣長(1730～1801)が『源氏物語玉の小櫛』(1796)において「もののあはれ」の文学論を展開し、源氏物語を「あはれ」の文学、枕草子を「をかし」の文学と名付けたが、この偉大な発見は後世の厳密な索引作成作業を通して再確認された事実でもある。解釈するという意味を追って「読む」作業だけではわからなかったことが、データであるテキストを記号として分析することによって、作者さえも気づかずに無意識に使っていた言葉の「差異」が構造的に浮き彫りにされるのである。

シソーラスは索引の一種である。シソーラスとは、元来ギリシャ語の「貯蔵庫、宝庫」の意味から派生した語で、「専門辞典、百科事典」のような知識の宝庫を意味していた。1852年にPeter Mark Roget(1779～1869)が「概念のカテゴリーに語を配列した語彙集」という意味で用い、広く修辞用に類語を集めた辞典を指すようになった。しかし、近年情報検索の研究

が進むにつれ、索引相互間で同義、階層などの関連と従属を示すように用語を編纂したものを指し、その機能は、情報の蓄積と検索用に、標準化し統制した語彙を提供することにある。今日では、個人が日常的に電子情報を利用・提供するようになり、情報検索時の語彙統一ツールとしての意味がシソーラスという概念の中心的な意味となって一般に使用されている。

### 3. 書誌学的研究方法

研究方法は、文献の構造的な特性を明らかにすることを主たる目的とする書誌学的研究方法を用いた。『看護覚え書』をセンテンス単位、フレーズ単位、ワード単位で分析することによって、意味を理解していただくだけの読み方では分からない、テキストそれ自体の構造を分析する方法である。研究方法に関しては、既存の索引作成法に学び、索引作成ソフトウェアは使用せず、従来通りのカードを基にした手作業による索引作成法に準拠した。

第1版の初版『看護覚え書』の原文テキスト(1992年Lippincott Company発行の復刻版)を底本として、1センテンス毎の全文データベースを作成し、これを基に、チャプター番号、パラグラフ番号およびセンテンス番号からなる所在指示番号を配列した索引とシソーラスを作成した。この際、小玉香津子・尾田葉子訳「看護覚え書きー本当の看護とそうでない看護について」(1985)を参照に、原文になるべく忠実な訳を便宜的に付した。

また正確を期するために、検索用コンピューターソフト(NTT、AT-POWER FINDER)および(POWERSEARCH)を用いて、重複や漏れがないかを点検・確認した。

## II. 『看護覚え書』の構造化

1. 『看護覚え書』の1センテンス毎の全文データベース  
第1版(初版本)『看護覚え書』の原文テキストを

底本として、1 センテンス毎の全文データベースを作成した。抽出カード数は1,666 枚。すなわち『看護覚え書』は1,666 センテンスから構成されていることがわかった。小見出し数は195、パラグラフは、464 であった。パラグラフは、テキストの書き出しが3 文字下がっているものをすべてとった。

## 2. 『看護覚え書』の索引

第1 版（初版本）『看護覚え書』の原文テキストを底本として、名詞を中心に、名詞句、形容詞、副詞、動詞を含めた音順索引（alphabetical index）と主要な概念についての分類別索引（classified index）を作成した。

音順索引の索引語（見出し語）は、名詞が1,234 語、それ以外の品詞は1,010 語である。出現頻度の高い語は、

patient <395>、 I <237>、 sick <211>、  
nurse<195>、 room <151>、 air <129>

であった。

分類別索引の分類項目を以下に示す。

病名・病態、薬剤、医療用具、身体、飲食物、動物、色、学術、人物名、地名、生活用品、商業、雑誌名、論文名、曲名、略字、記号、人種、古語・ラテン語、大文字、大文字で始まる語、斜体文字、“ ” でくくられた文字、引用、小見出し

分類別索引の項目数は25、索引語は、語、句、およびセンテンス計763 であった。

## 3. 『看護覚え書』のシソーラス

第1 版（初版本）『看護覚え書』の原文テキストを

底本として、シソーラスを作成した。

シソーラスは、看護についての同一概念を表していると思われるセンテンスグループから、看護の主題を13 の主要なカテゴリーにまとめて作成した。収録できなかったセンテンスグループをその他として14 番目にまとめた。

これら14 の看護の主題毎に、キーワードを見出し語として掲げ、シソーラスとした。

抽出した14 の看護の主題を以下に示す。

nursing, patient, nurse, disease, pathology,  
the well, hospital, to be in charge, round a  
sick person, private nursing, nature, God,  
mother, subject of these notes,

キーワードは67、シソーラスとして抽出した語彙は804 あった。

## III. 『看護覚え書』の構造を読む

作成した『看護覚え書』における出現頻度の高い言葉およびシソーラスで抽出した14 の看護の主題、67 のキーワード、804 の語彙から、ナイチンゲールの看護の主要概念を取り出し、考察した。

1. 『看護覚え書』のキーワードは“patient, the sick 病人”である

本研究において、最も出現頻度の高い言葉は patient であり、395 箇所が登場した。次に sick が211 箇所があり、sick、the sick という名詞として132 箇所、sick man、sick person という形容詞として79 箇所に使われていた。どちらも同じ「病人」を表す patient の類義語である。また、case は、ほとんどが症例という意味で使われているが、関係代名詞が who であったり、意志を表す動詞が用いられたり、明らかに「病人」を表しているものは patient の類義

語として取りだした。

patient のシソーラスと出現頻度を以下に示す

patient <395>、 sick <211>、 invalid <11>、  
sufferer <6>、 case <19>

これらは、private patient、 private sick や English patient、 English sick また occupied patient、 occupied invalid、 さらに real patient、 real sufferer のように同じ形容詞がそれぞれの語に使われ、 patient、 sick、 invalid、 sufferer には互換性があった。

2. 『看護覚え書』の中心概念は“environment 環境”ではなかった

これまで、ナイチンゲールは“Nursing’s first environmental theorist”<sup>10)</sup>と呼ばれ、『看護覚え書』を評して“environmental theory of nursing”<sup>11)</sup>とされている。しかし、ナイチンゲール自身は「environment 環境」という言葉を『看護覚え書』の中で一箇所も用いてはいない。彼女が「環境」の類義語として使った言葉とその出現頻度は、

surroundings<1>、 circumstances<8>、  
influence<2>

であった。これらの名詞は中心概念として働いているのではなく、病人の周囲の状況を説明しているものばかりである。さらに round や about を用いて、「病人の周りの～」という表現が2箇所にあった。

effect in sickness の類語によって病人への影響を表したものが他に26箇所あった。

環境の類義語を追っていくことによって、病人を取り巻く周囲の状況を描写したり、病人に影響を与えるものを述べた表現が抽出できた。そこでの彼女の視点は、環境にあるのではなく、あくまでも病人に向かい、

病人を取り巻く周囲の状況を通して、病人のための回復への手段を探っていることがわかった。

アメリカの看護学者トレースは、ナイチンゲールの『看護覚え書』の「中心概念は環境 (environment) の概念である。彼女は、心理的な、または社会的な環境よりも自然環境を強調する傾向があった」<sup>12)</sup>と述べた。これが一般化して、ナイチンゲール理論は環境理論であると、世界的にもエンバイロメンタルセオリーと呼ばれ定説のようにになっている。

このように言われてきた理由の1つには、環境 (environment) という言葉のアカデミックな流行が影響しているようだ。ナイチンゲールが活躍した時代にも環境 (environment) という言葉は存在したが、世界的にこの言葉が脚光を浴びたのは、温暖化現象などの地球規模の環境問題が話題にされた1970年代以降である。看護理論が世界的に研究され始めたのも、ちょうどこの時期である。「近代看護の祖」と呼ばれるナイチンゲールが現代思想の流行語と結びついたのも決して偶然ではないだろう。確かに彼女は、貧しい人々の住居環境に目を向け、排気口や下水の臭いや汚れ、家庭衛生の不備を指摘している。しかし、注意深く英文を眺めてみると環境 (environment) という言葉は『看護覚え書』のどこにも使われてはいないことがわかる。邦訳では「環境」という言葉が使われていても、英文には存在しない。病人の周囲の状況、病人に影響を与えるものなどが「環境」という目新しい概念に置き換わって翻訳されていたのである。

『看護覚え書』の各章のタイトルがそもそも、病人をとりまく状況であり、その人の健康に不可欠な環境要因である。しかしナイチンゲールは環境それ自体のことや環境問題を語っているわけではない。どこにも環境 (environment) という言葉は存在しない。もし、環境 (environment) という言葉が中心概念であるなら、その言葉が一度も使われていないというのはあり得ないことである。言葉というものはそれ

自体が概念を表わすものである。つまり『看護覚え書』において、“environment”という概念は存在しなかったということになる。『看護覚え書』を注意深く読んでみると、ナイチンゲールの注視点は環境そのものにあるのではなく、あくまでも病人に目が向けられ、病人中心に考えが進められているのがわかる。

人間は環境という背景のなかに存在している。中心にあるのは人間であり、環境はその人間のまわりの要因にすぎない。ナイチンゲールが語ったのは環境問題ではなく、その人の健康の問題である。best conditionにするのは、“nature to act upon him 自然が患者に働くように”するためであり、それこそが看護の概念なのであった。

ナイチンゲールは病人のための環境とは何かを語ろうとしたのではなく、病人に焦点が向けられ、病人を best condition にするための看護とは何かを『看護覚え書』の中で明らかにしたのである。

### 3. knowledge of nursing と medical knowledge の相違

ナイチンゲールは医学に対する学問としての看護をどのようにとらえていたのだろうか。彼女は看護と医学の“knowledge 知識”の相違について次のように述べている。

#### PREFACE.1-5

It is recognized as the knowledge which every one ought to have — distinct from medical knowledge, which only a profession can have.

それは（看護の知識は）、誰もが持つべき知識であると考えられ、専門職だけが持つことのできる医学的知識とは別ものである。

彼女は、看護の知識は“every one ought to have 誰もが持つべき”知識であり、“only a profession can

have 専門職だけが持つことのできる”医学的知識とは、そこが違うと言うのである。

profession は5箇所があり、以下のように使われている。

medical knowledge, which only a profession can have,  
Men whose profession like that of medical men, head of our medical profession,  
medical and other professions,  
nurses by profession

また、professional ～は、6箇所があり、nurse を修飾するものが5箇所、professional practice で看護師の業務を修飾するものが1箇所であった。厳密に言葉を使うナイチンゲールが nurse に profession を使っていたことが確認できる。1859年当時、卑しい手仕事と言われていた看護師の業務や看護師に対して、ナイチンゲールは既に Profession という言葉で語っていたのである。しかし、nursing profession という表現は、『看護覚え書』にはなかった。

medical knowledge は、profession だけが持つべき知識であるが、knowledge of nursing は、profession も持ち、且つまた“every one ought to have 誰もが持つべき”知識なのであった。medical knowledge は、profession のためだけの非常に狭く限られた知識であることを意味している。

看護の歴史は非常に古い。そもそも看護は人間の普遍的な営みの1つであり、誰もが経験的、実際的な指導を受けることによって継承できる技術であり、資質であると言える。

knowledge of nursing という彼女の概念には、医学とは違う看護学の領域の広さ、人々に開かれた知識であるという学問的な意味を読み取ることができる。

4. art と science の対比

X III. 44 - 2

Vast has been the increase of knowledge in pathology—that science which teaches us the final change produced by disease on the human frame—scarce any in the art of observing the signs of the change while in progress.

病気が人体に及ぼす最終的な変化を私たちに教える科学である病理学における知識の増加は非常に大きい。ところが、進行している変化の兆候を観察する術についての知識はほとんど増えていない。

彼女は看護の知識を、進行している変化の兆候を観察する“art”であるとし、一方、病理学の知識を、病気が人体に及ぼす最終的な変化を私たちに教える“science”であるとし、これら2つの概念を対立させている。artの語源は、ラテン語のart, arsであり、職人的なわざ、技術を意味する。『看護覚え書』にartは10箇所あり、そのうちart of nursingが3箇所であった。これらartは同様に術や技という意味で用いられていた。

scienceは、上記の1箇所だけにあり、他にscientific～が5箇所にあった。

scientific knowledge, scientific physician,  
scientific men, scientific end, scientific exposition,

この5箇所は、内容的にはすべてがscienceに対してartが優位であることを暗示するものであり、scienceは否定的な意味で使われていた。ナイチンゲールは、scienceとartを対立概念として用いていたのである。

scienceの語源はラテン語のscientiaであり、「知る」

の現在分詞の語幹から派生し、「知識」という意味を持つ。病人や病気を知的対象として知的関心からだけ見ると、かえって現実をとらえることができない。知識よりも現実の経験や観察から得た生身の感性に蓄積された職人的な技である“art”をナイチンゲールは看護の本質として見ていた。彼女は科学を万能であるとは考えず、手仕事と言われ蔑まれた看護の技artにこそ注目している。そしてそれは、ナイチンゲールの時代、ダーウィンやパスツールが登場し、「科学的」であることが非常に注目されていたという時代背景ゆえでもあった。

彼女には、医学が必然的にscienceにのめり込まざるを得なかった時代に、医学のscienceとは逆の、観察と経験から学んでいく看護のartの知識をすべての人々に伝えたいという意図があった。“only a profession can have”である医学の知識にはそのチャンスはないが、“every one ought to have”である看護の知識は、人々のために開かれた知識であり、誰もが学ぶことができ、日常生活に生かしていくことができる知識なのである。科学主義に立った専門家のための知識である医学とは違い、素人が可能な限り広い視野と有効な力を手に入れることができる開かれた看護の知識であった。

しかし、今日では看護診断、看護治療などの言葉に見られるように看護の科学性、専門性が高まり、その知識が複雑になってきている。

術がいつも先に立ち、科学よりも優勢でなければならぬ看護までが医学と並ぶ専門職という方向へのみ発展を続け、scienceに向かっていく感のあるその後の成り行きを、ナイチンゲールは既に予感していたのかもしれない。

ところで、ナイチンゲールは『看護覚え書』の33年後の1893年にアメリカのシカゴで開催された「コロンプスのアメリカ大陸発見400年を記念する世界大博覧会」のチャリティ会議「病院および看護分科会」

に論文「病人の看護と健康を守る看護」を寄せた。その冒頭で彼女は、看護について次のように述べている。

A new art and a new science has been created since and within the last forty years.

And with it a new profession—so they say; we say, calling. (Nightingale, 1893)

新しい芸術であり、新しい科学でもあるものが、この40年の間に創造されてきた。そしてそれとともに新しい専門職と呼ばれるものが生まれてきた—我々は天職と呼んでいるのであるが—が生まれてきた<sup>13)</sup>。

ナイチンゲールのこの言葉は、「看護は art であり、science でもある」という現代看護の主要なテーマの根拠として今日広く引用されている。野島良子は、ナイチンゲールのこの言葉を引用して、看護学においては「一般的には art と science は矛盾対立するものとしてではなく、互いに各々個別に“為すこと”(実践)に吸収されるものと見なされている<sup>14)</sup>という現状を指摘している。

また、ヒルデガード・E・ペプロウは、art と science をめぐる相矛盾する様々な論文を挙げながら「これらの相矛盾する諸説は、2つの言葉 (art と science) を検討し、さらに定義を明確にする時期であることを示唆している<sup>15)</sup>と述べている。

これらの指摘に見られるように、art と science の問題は、看護学の根本的な論点であり、ナイチンゲールがどのように考えて1893年に「新しい芸術 art であり、新しい科学 science でもある」と述べたのかは、彼女のすべての著作から改めて追及されるべきであろう。

これらナイチンゲールの言語への全面的な問い直しの作業過程で把握することのできた彼女の看護思想及びその構造について独自の接近を試みた。ナイ

チンゲールの著作という看護学史上の最重要古典についての研究であるがゆえに、15年を経た現在においても、古くて新しい看護学上の知見を改めて問い直すことができると考える。

## 引用文献

- 1) 小川典子：ナイチンゲール『看護覚え書』の構造を読む—方法としての書誌学的研究—、ゆみる出版、1999.
- 2) 加島祥造：引用句辞典の話、p.189、講談社、1990.
- 3) Nightingale, F. : Notes on nursing, 1859、小玉香津子・尾田葉子訳、二つの看護覚え書き、日本看護協会出版会、1980.
- 4) 中村美知子・吉川龍子：翻訳的家政書にみる看護法、看護教育、32(1)、pp.806、1991.
- 5) 後藤啓子：『看護の栞』研究、日本看護歴史学会誌、18号、pp. 77-80、2005.
- 6) Skertkowitz, V. : Florence Nightingale 's Notes on Nursing; The first Version and edition, *the Library*, 15(1), pp.24-46, 1990.
- 7) 小玉香津子：『労働者階級のための看護覚え書』の実際、およびその今日的意味について、総合看護、32(2)、pp.17-24、1997.
- 8) 掘込静香：書評—The Art of Index—、書誌索引展望、19(3)、36頁、1995.
- 9) 新井皓士：源氏物語・宇治十帖の作者問題、117(3)、pp.397-413、一橋論叢、1997.
- 10) Gropper, E. I. : Florence Nightingale; Nursing's first environmental theorist. *Nursing Forum*, 25 (3) pp.30-33、1990.
- 11) Torres, G. : Florence Nightingale. In J.B. Gorge(Ed.), *Nursing Theories*. 3Ed, pp.31-42, Norwalk, Connecticut, Appleton & Lange, 1990.



- 12) Torres, G. 1980, 南裕子・野島佐由美訳、フロレンス・ナイチンゲール. 看護理論集、pp.34-47、日本看護協会出版会、1982.
- 13) Nightingale, F. : Sick-Nursing and Health-Nursing,1893, 薄井担子・田村真・小玉香津子訳、病人の看護と健康を守る看護、ナイチンゲール著作集 2、pp.125 現代社、1974.
- 14) 野島良子：看護学の根本問題—実在するものと知識の起源について、日本看護科学会誌、12(4)、p.2、1992.
- 15) Peplau, H. E. : The Art and Science of Nursing : Similarities, Differences, and Relations, Nursing Science Quarterly, 1(1)、pp. 9, 1988.